

【氏名】木内智康

【所属大学院】（助成決定時） 東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】

メソポタミア初期歴史時代における円筒印章製作技術の研究

【研究の目的】

円筒印章は古代西アジアに広く見られる遺物であり、その名の示すように円筒形を呈した印章である。主に粘土の上を転がすことによって物資管理のために用いられており、場合によっては身に着けて記章としても用いられていたと考えられている。この円筒印章の研究はこれまでも多くの研究者によってなされており、社会経済上重要な役割を果たしていたことが知られている。しかしながら、それら先行研究の大部分は印章表面に刻まれた文様の研究であり、製作技術に焦点を合わせた研究は未だ十分にはなされていない。本研究の目的は、遺跡から出土した円筒印章を用いてこれまで未解明であった初期歴史時代の円筒印章製作技術の一端を解明し、その上で該期の社会についての理解を深めることにある。本研究では特に、遺跡より出土したことが確実な（購入品や寄贈品ではない）資料を扱うことに重点を置いている。

【研究の内容・方法】

研究方法は主に以下の3点からなる。第1は、西アジアの遺跡から実際に出土した印章から歯科用シリコンを用いて象りを行うことである。歯科用シリコンを用いるのは、次の第2点目で述べる観察に耐えうる精密な象りを行う必要があるためである。第2は、シリコンに転写した印影を走査型電子顕微鏡にて観察するというものである。光学顕微鏡ではなく走査型電子顕微鏡を用いる理由は、印影の起伏の観察が容易であることと、観察結果を視覚的に提示するのに適していることによる。シリコンによって象りした印影を観察する利点は、印章そのものが不要なく、かつ非破壊の観察方法であるという点にある。第3は、印影（彫刻、穿孔など）の複製実験を行い、それらについてもシリコンによる象りをした上で観察を行い、実際の印章に残された印影との比較を行うというものである。ただし、筆者による複製実験のみならず、先行研究による実験の成果も利用している。

本研究で筆者が対象資料としたのは、シリア、アレッポ博物館所蔵の円筒印章である。同博物館は筆者の研究対象であるメソポタミア出土の印章を含めた数百点におよぶ円筒印章のコレクションを持つ。資料調査は2005年7月から8月にかけて行った。筆者は最終的に複数の遺跡（比較のためメソポタミア外の遺跡も含む）から出土した35点の円筒印章を選び出し、シリコンでの象りを行ったうえでそのシリコンを日本に持ち帰った。日本における走査電子顕微鏡での観察は東京大学総合研究博物館にて行った。顕微鏡は日立熱電子放射型操作電子顕微鏡S-2250Nを使用し、データはデジタル画像（TIFF形式）にて

保存した。複製実験には主に石灰岩、ラピス・ラズリ、蛇紋岩を用いた。これらは、実際該期の印章の多くに用いられていた石材である。

#### 【結論・考察】

本研究における成果の1つは、確実に遺跡から出土した資料を用いて、筆者がこれまで国内所蔵資料により明らかにしてきたこと、とりわけ前三千年紀に技術上の画期を見出せることを追認できた点にある。国内所蔵資料の大部分は購入品など来歴の不明な遺物であるが、今回の調査によって確実な出土資料によっても裏付けることができた。特に、遅くともアッカド期（およそ前 2350 年から 2100 年ごろ）までに製作技術上の大きな変化が見られること（ここでは特に回転円盤の採用）を示唆する結果が得られた意義は大きい。

もうひとつの成果は、そうした製作技術の広がりを地理的に把握できたことである。今回、メソポタミア以外の遺跡出土資料も比較検討した結果、上述した技術革新がメソポタミアを越えて地中海岸にまで広がっていた可能性が示唆された。アッカド帝国の地理的広がりを考えると、非常に興味深い結果が得られたといえる。この点については今後も調査を継続していきたいと考えている。